

Title	11才の少女のロールシャッハテストの解釈
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 55 p.77-p.93
Issue Date	1982-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80869
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

11才の少女のロールシャッハテストの解釈

氏 原 寛

An Interpretation of a Rorschach Protocol of 11-year-old girl

Hiroshi UJIHARA

The author presents an interpretation of an 11-year-old girl's Rorschach Protocol. The author expects the readers to read his paper (Ujihara 1982) on the patient and the scoring of the test beforehand. This report is written for the beginners, therefore he is afraid that the explanation may be too detailed. However, he tries to make clear what he thinks about the test for the experienced testers. He will be happy if this report can be useful as a concrete material for those who are interested in this test.

今回は11才の少女のロールシャッハプロトコルの解釈について報告する。プロトコルおよびスコアリングについてはすでに報告した（氏原1982）。

I 量的分析

1. 領域

(1) W%が78で著しく高い。Wはプロット全体を意味づけようとするもので、現実的・具体的なDに比べて抽象的・観念的な態度を表すといわれる。それだけ発達的には進んだ段階を反映している。しかしこの被験者のパーセンテージはいかにも高く、11才というその年齢を考えるとなおのことである。しかもW:M=18:2であり、こうした抽象的な態度を支えるだけの内的な力が伴っているとは考えられない。つまり、場面の意味を全体として把握するためには、主体の側にかなりはっきりした内的な世界がすでにあって、外界の知覚がそこで意味づけられねばならない。後でも述べることであるが、こうした内的世界を支えるのがMによって示される能力である。だから、多くのWを出しながらMの数が少ないのは、十分な力がないのにいわば背のびして全体の意味を読みとろうとする態度を反映している、とみななければならない。何が被験者を駆り立てて、こうした無理なあり方を強いているのかを明らかにするのが今後の一つの観点となる。

(2) 又、このプロトコルにはマイナス反応が二つみられるのであるが、いずれもW反応である。一つはVカードの第2反応でありもう一つはⅧカードの第2反応である。はじめの反応はまずクチバシを見て2羽のアヒルとしたものであるが、クチバシということまでとどめておけばdのプラス反応であった。後の反応は上からみたサカナなのであるが、D₃の先を口としたためサカナの位置関係がはっきりせず、マイナス0.5に評定されたものである。これも口についてうんぬんしさえしなければ普通の反応であった。共通しているのは、口唇的なものを無理に全体に組みこもうとして失敗していることである。この被験者はD反応も出しているのだから、何もかもをWに纏めようとするわけではない。とくに口にかかわるものがWと関係しているのである（もっともⅧカードの第2反応には口の指摘があるが領域はDにとどまっている。しかしこれにはそれなりの理由がありそうなのでそれについては後でふれる）。ということは、この子にとっては口唇的なもの一幼児的なものが、今何とか納得しなければならぬ問題になっているのではないか。それがこの被験者にW傾向を生ぜしめ、問題が口唇的なものに関わる時、時に現実吟味能力を著しく低下せしめるのではないか。つまり口唇的欲求を自らのパースナリティの中に適切に位置づけるためには、まだ内的世界の充実が不十分であるにもかかわらず、あえて行おうとする所に前述の背のび反応の原因がありそうに思われる。だとするとこうした現象は、子どもからおとなへの過渡期にしばしばみられる発達的な問題ということになり、必ずしもこの被験者のとくに偏倚したありようとはいえないくなる。

(3) 次に、additional ながら di が一つあることに注目したい。di は普通はみられないプロットの内側に何かを知覚することであり、人一倍の敏感さ、あるいは隠されたものを見出そうとする態度、を反映している。これが前記のW傾向と結びつくと、場面に現れたものも隠された意味もすべて見逃すまいとするせんさく癖となりかねない。思春期の、今まで未知のものが内外ともに立ち現れる時、ある程度こうした態度の生ずることは当然かもしれない。しかし、付加反応とはいえ di がそれ程しばしば現れるものではないだけに、被験者がかなり神経質に周囲の世界の意味をうかがっていることが考えられる。又、この di はFcと共に生じており、cが愛情欲求なり依存欲求を表すことを思えば、これが内に接近欲を秘めた「顔色を読む」態度として出るかもしれない。とすれば前述の、依存欲求を全体像の中にどう位置づけるかで混乱しているという仮説に対応することになる。とくにそれが対人関係の文脈で、自らをどう処理すればよいのか、まず相手の顔色を読んで自分に期待されたあり方を探る、という態度につながるわけである。これも、今までの比較的主客一体の未分化な状態から、次第に主体が分化してくるための必然的結果だとすれば、さきの思春期に入っただけの動揺という仮説が裏づけられることになる。

(4) さらに付加反応ではあるがS:5というのも少くない値である。Sは、普通図とみられる黒色部分を背景とする見方であり、それだけ偏った見方とされているが、逆に、人はどうあるうとも自分は自分といった信念の表れでもあり、形体水準の良否が問題になるにはしても、一応自我の強さを反映しているものである。しかし、それが時に欠落部分への敏感さを反映している

ことがある。強情ないし意地っぱりが、内心の不安感を蔽いかくす壁として働いているわけである。これも又、この被験者にみられる一方での頑張りすぎと他方それを支えきれぬ弱さとの両面を示している。ただしすべて付加反応であり、それに対するかなりの抑制が働いていることになる。だから、現実場面でこの子なりの依拠地さがそのまま現れるわけではないにしろ、それだけ内的葛藤ないし緊張の高まっている可能性がある。

以上要するに、自他未分化な子どもの状態から、ようやく客観世界に対応するものとしての自我が芽ばえ、逆にそれが、自らに対立するものとしての客観世界の意味を確かめる働きを促している。しかし、それにはまだ主体的な内界が十分に熟しておらず、一応の力の意識は感じられているかもしれないが、逆に無力感も強い。とくに、依存ないし愛情欲求をどう全体的人格にくみこむかに問題があり、その際現実吟味能力が著しく低下することがある。これを病的レベルのものとみるか一時的な発達障害（というよりも当然こえねばならぬ動揺状態）とみるかは微妙であり、他の指標も踏まえた上で判断しなければならない。

2. 運動反応

(1) 運動反応は全部で $7 + 4$ であり、 $R : 23$ に比べればかなり多い。よくいわれるように、運動反応は動きのないプロットに動きを見るのだから、何らかの内的な運動感覚がプロットに投影されたものと考えられる。いわば自分の内的、つまり主観的な感じに基づいて外界、この場合プロット、を意味づける態度である。それだけ客体を主体の中にとりこんでしまう働きということが出来る。しかし、それが人間運動反応か動物運動反応か無生物運動反応かによってそれぞれその意味は異なる。W に比べてこの被験者に M の少ないこととその意味については、すでに 1—(1) で述べた。だから運動反応の数が全体として多いというのは、FM と m が多いということである。事実、 $M : FM$ および $M : FM + m$ はそれぞれ、 $2 : 4 + 1$ と $2 : 5 + 4$ である。クロッパーはこの比率を用いる場合、少なくとも三つの M がないといけないといっている (Klopfer 1954)。X カードの第 2 反応を M とスコアしてもよいことは、前回スコアリングについて報告した時すでにのべた。又、M と FM などの比をみると自体も無駄なことではない。だからクロッパーの仮説を丸々適用しようとしないう限り、ある程度この比率を参考にすることができよう。いずれにしても、FM と m に比べて M の数がかなり少ないことは明らかである。

(2) ところで(1)にのべた運動反応について、この解釈仮説は運動反応全体についていえることであるが、とくに M について強調されている。人間の形で運動をみることは、それが人間のものとして、したがって自分自身の実感として内的な運動感覚が認められている、というわけである。これは、そういう自分の内的な感じが人間一般、したがって十分客観的にも通用するという前提を含んでいる。逆にいえば、主観的な感じが基になってはいるものの、たえず客観世界との対応がはかられているのである。そのためには若干の余分なエネルギーが必要であり、M 反応が内的な豊かさを必要とするとされるのはそのためである。同じ理由から、こうした内的な動きは比較的意識化されやすく、それだけコントロールがきくということもできる。これらのことは、いい

代えれば内界と外界、主体と客体とが分化しているからに他ならない。内界の存在に気づくことは、その儘それと対立する外界の存在に気づくことでもある。それが時に外界とのかい離をもたらすことはあるにしても、必ずしも外界の動きに左右されぬ自我の強さはそれによってはじめて支えられる。M がいわゆる ego-strength の指標とされるゆえんである。

(3) しかし動物運動反応の場合は、それが動物のものとして感じられているのだから、その感覚は自分自身のものとしてはうけとめられていない。ロールシャッハ以来、運動反応として人間運動反応以外を認めようとしなない人たちのいるのはそのためである。ところで、こうした内的な感じが自分のものとしてうけとめられていない場合にはどういことが起るのであろうか。容易に考えられるのは投影のメカニズムである。周知のように、われわれはこのメカニズムによって自分の内にあるうけ入れ難い衝動を他人の内にみる。それが人間以外のものに投影されると、いわゆる相貌的知覚が生ずる。山がゆくてを遮ったり小川のせせらぎが唱いかけてくるように感ずるあの感じである。一種のアニズムなのであるが、われわれがみずみずしい世界との一体感を経験しうるのはこうした感じを通してのことであり、FM が自発性とか生命感と結びつけて考えられるのはそのためである。

要するに FM は、感じられてはいるが意識されていない内的な感覚なのである。だから実感としての確信はあるのだけれども、それを自分自身のものとして感ずる力が弱い。そしてその感じはむしろ外側のものとして感じられるようになる。同じ外界がバラ色に見えたり灰色に見えたりする。あるいは自分を脅やかすものとして、又は自分に微笑みかけているように感じられることがある。そうした色あいは主に FM の内容からうかがうことができよう。それだけに M と違って自他が未分化であり、生き生きとした、あるいは生ま生ましい実感を伴っているわけである。

ところで無生物運動反応についていえば、それがみずからの内部の動きとして感じられている点については M と変わらない。しかし自我との関わりが遠いのである。その感覚はいわば自我の中の異物のようなもので、自律的に勝手に動くのでコントロールのしようがない。それだけに個人の主体性を脅やかし、m が不安の指標とされるのはそのためである。

(4) ここではじめの比率に戻ると、この被験者の内的エネルギーが十分建設的に働いていないことが分る。FM の多いことは時に被験者が無意識的な衝動に促されて行動化する可能性を思わせる。ただし前述の X カードの第 2 反応にみられるように、FM 又は M と A の結びつきは、おそらく FM 的なものの M への移行を示しているのかもしれない。運動反応ではないが、Ⅲ カードの第 2 反応でカニがクツをはいているというのも、ディズニー的幻想といってしまうまでもだが、やはり動物的なものの人間化という方向性を示している。ということは、被験者が現在、自他未分化な状態から次第に自我を確立しつつある、と考えてよいと思う。

FM が外界との生き生きした関わりの可能性を反映していることはすでに述べたが、ここで考えねばならぬことは、この被験者が FM 一つを出していることである。この子にとって、体をくっつけて寝そべっているアヒルの感覚は、いわばひと事なのである。このアヒルの動きを相互

依存的で退行的な状態と考えるならば、こうした欲求がありながらそれが自我の体系の中にうまく組みこまれておらず、かつその際現実吟味の上で大きい障害の現れることになる。しかし、それが自他未分化→自立の方向で現れている以上、一種の発達上のつまづきとみることが可能であり、それ自体病的なプロセスの現れと考える必要はない。

(6) mの多い場合、極端になると理論的には一種のさせられ体験めいたものを考えることができる。しかしこの子の場合、1+3であるから大部分は付加反応である。付加反応は意識的にある程度抑制されている場合に生ずる、といわれている。したがってこの被験者の感じている主体性喪失の不安は、それ自体がすでに主体性の出現を前提としていることはとも角、一応コントロールしうる範囲内のものと考えてよい。そうした抑制的態度は、当然FMに示される衝動性をもかなりコントロールするであろうし、色彩反応についての考察をまたねばならないとしても、当面、この子どもにも衝動的な行動化はないものと思われる。

以上運動反応を通じていえることは、この子どもがかなり豊かな内的資質に恵まれながら、自他の分化のプロセスで依存ないし愛情欲求の処理に若干の混乱を示していることである。

3. 色彩反応

(1) 色彩反応は、主体が客体によってまず動かされてしまうような経験、を反映している。いわゆる「我を失う」経験であるが、日常場面では一切の対人関係がこれに当る。つまりわれわれは、今までに会ったことがなく、これからもおそらく会うことのない見ず知らずの人であっても、相手が人でさえあれば共にいて多かれ少なかれ動かされる。たとえば旅先のバスで偶然向い側に乗り合わせた農婦を考えてみればよい。相手が何者であるかを確かめる以前に、われわれは身構えさせられている。その意味で人間は、お互いに存在することによってすでに犯し犯されあっている(村本1978)、と考えてよい。だから、人に対してこうした感受性を持たぬ人は、それだけ人間に対する共存性としての共感性に欠けているといわねばならない。ロールシャッハ的にいえば共感には二種あって、一つはMの一つはC的であることは以前に別な所で述べた(氏原1981)ことがあるのでここでも繰り返すことはしない。要約すればMを内的、Cを外的ということはできよう。もちろん対象はつねに人間に限られるわけではなく、何か外的なものによって感情を触発されることが、色彩に反応することと対応しているのである。

(2) ところで運動反応でFM優位、色彩反応でCF優位の場合は衝動的な行動化の確率が高い、といわれている(Klopfer 1954)。しかしこの被験者には主反応としてのCFがない。だからそうした行動化の可能性は低いのだが、逆に、FM優位に示される内的エネルギーが人間関係の場で発散されないために、身心症的な問題が生ずるかもしれない。

体験型は2:0.5で共貧型というべきかもしれないが、一応M優位である。むしろ運動反応全体と色彩反応全体をみるべきだと私は考えているが、それによれば7+4:1+3で断然運動反応が優位に立っている。こういう場合、被験者の内的エネルギーを何らかの形で外在化することが必要である。被験者の空想を誰かが共にしたりそれを何かの作品に仕上げさせるとかが考えられねば

ならない。内界が豊かなだけに外界とのかかわりが薄れると、前述の心身症として顕れるか一種の自閉的世界にひきこもる可能性があるからである。FM+m と Fc+c+C の比率も内向的な傾向を強く示している。

(3) 色彩の主反応は FC が 1 であるが、付加反応に FC:1 と CF:2 がある。僅かながら FC > CF+C であるから未分化な感情的爆発は考えられない。又、2つの CF 付加反応はいずれも W に伴っており、それだけ場面全体の中にくみこまれているわけで、ここでも抑制的な感じが強い。しかし、全部で 4 つの色彩反応は必ずしも少ないとはいえず、又、Ⅷ, IX, X% も 34.8 であり 30 % を越えている。さらにⅧ～Xカードの所要時間は 3 分から 7 分弱に及び、他のカードが 1 分ないし 2 分程度ですまされているのとはかなり差が大きい。ということは、この被験者の色彩に対する感受性は人並み以上だということである。この人は色彩場面、つまり対人関係の中でかなり動かされ精神活動も活発になる——反応数が増える——のだが、直接その気持を表出するのには相当な抑制が働く。しかし、そのためかえてその場面に心が残り、いつまでもそこから離れることができないのではないか。いわば惹きつけられながらそこで適切に行動することができず、いつまでも未練たらしくグズグズするという態度がみられるのかもしれない。しかも、Ⅷ～Xカードの諸反応の形体水準の平均は 0.8 であり、全反応の平均の約半分のレベルに落ちている。それだけ現実吟味能力が低下している。対人場面に対するアンビバレントな態度と共に、未分化な行動化には至らぬまでも、やや未熟な精神状態への退行が生じていると考えねばならない。このアンビバレンツが、今までの自由な人間関係が抑制的なものへ移行しているためか、逆にひっこみ思案のあり方が積極的に外界に向かおうとするためなのかは微妙であるが、運動反応での所見などを思えば、おそらく前者、つまり自我のめざめと共にあらためて自分と他者のかかわりが意識されるようになり、納得のゆく関係の結べぬままに、惹きつけられながらもぎこちないという中途半端な態度ができているのだと思う。

4. 形体反応

(1) 形体反応はプロットの意味づけを形体に基づいて行うものである。以前にも述べたことであるが、物の形というものは予め決まっているので、われわれが恣意的にどうこうすることはできない。決った形を決った通りに意味づける—知覚する—ことが現実適応には不可欠なのである。したがって形体反応を、主体として客体に合わせる働き、と考えることができる。運動反応が客体を主体に合わせるのとは丁度反対の働きである。しかしそれらが共に、主体の働き、したがって ego-strength の指標であることには変わりがない。それは、色彩反応が主体の客体に動かされてしまう、「我を失う」経験であるのと対照的である。もちろん、世界に自分を合わせるだけでは自分が生かされないし、かといってありのままの世界を即物的にうけ入れることがなければ世界の枠組が失われてしまう。だから F% の範囲が大切なのであるが、日本人の場合クロッパーの基準とは違って 30% から 60% のあたりが望ましい範囲のような気がしている。

(2) だからこの被験者の F%:48 という数値に問題はない。ただし、Ⅷカードの第 2 反応に F

一の一つあるのを見逃すことはできない。それはFKの可能性を思わせる反応で、魚の口にとらわれて全体の意味づけが少し歪んだものである。ロー口唇愛といった連想にFKの可能性を考え合わせると、客観的に外界を見ようとする時にさえ、依存—愛情欲求がちらちらすると現実吟味能力が崩れるとみななければならない。そうした自分のありようを必死に客観視しようとする努力にもかかわらず、である。そこから当然のこととして、とくにこの被験者にとっては、形体反応と陰影反応との関係についてみる必要があるとなってくる。

5. 陰影反応

(1) 陰影反応は、主体が客体との関係性を見ようとする態度を反映する、と私は考えている。主観的には、外界が暖いとか冷たいとか包みこんでくれそうだとか呑みこまれそうだとかいう感じである。だからこれは依存性—愛情欲求につながり、いわゆる基本的安定感と関係がある。依存性とはもともと信頼感を裏返していったものであるし、自他を信頼しうものだけが他人に依存することのできるのとは明らかなことだからである。だからロールシャッハテストでは、カラーでつまずく人よりも陰影でしくじる人の方が問題は深刻だ、と私は考えている。

(2) とところでこの被験者の場合、R:23に対する陰影:4は決して少なくない。クロッパーの指標F:Fc+FKも11:3+1で望ましい範囲内に入っている。十分人を信頼できるけれども、もて余す程依存的でもない、ということである。ただし反応がFcだけでcFのないのは、愛情関係依存関係においてもこの子どもが社会的枠組を忘れない、つまり今までの文脈からいえば、自立のためにがんばっている、とみてよいのかもしれない。FKは、陰影に対してある程度距離をおいて客観的に把握しようとする態度の反映である、といわれる。それだけ発達的には後の時期に属すものなのであるが、C反応の形体優位と合わせて、やはりこの被験者の自我のめばえが進みつつある現れとみなしてよいと思う。

(3) KFが一つあるが、これはいわゆる大洋感情を反映するものと考えられる。c反応は表面の材質を感じる反応であり、他者とかかわりは皮膚を通してのものである。それだけに皮ふの内と外、自分と他者の境界、いわば自我境界がはっきりしていると考えねばならない。固いとか柔いとか暖いとか冷たいの感じはそこからくる。しかしKFの場合にはこの境界がない。いわば自分も相手もごっちゃになった未分化な状態である。だから同じく暖いとか冷たいと感じても、それは触覚を通してというよりはもっとグローバルな感覚といってよいと思う。それだけに被験者にとってはえたいの知れぬ不安の指標である。陰影に関してはcFよりも未分化な反応ということができよう。だから一方でFKとFcがあり、他方cF抜きでKFのあるのは愛情欲求にやや極端な対立のあることを示唆している。それだけ緊張と不安が大きいものと思われる。つまり未分化な感情が十分整理されぬままに、分化した体系の中にくみこまれてしまっているわけである。見かけの適応の背後に案外な欲求不満や挫折感の隠れている可能性がある。

しかし全体としてみた場合、とくに陰影反応に大きい偏りがあるとは思えず、そこからくる基本的な人格障害は考えられない。

(4) C' が付加反応ながら5つある。そのうち白は2、黒は3である。それが色彩に対する敏感さなのか、とくに黒に対するそれなのかは不明である。暗いムードに捉えられやすいとはいえるのかもしれない。なお、 $Fc+c+C':FC+CF+C=2+6:1+3$ である。クロッパーの「やけどした子ども」仮説に従えば、ここでもこの子どもの行動化は考えられない。それが何らかの抑制の加わった結果であるとすれば、社会化—成熟—自我のめざめといった今までの文脈に沿うことになる。

6. 内容その他

(1) 内容については継起的に考える必要があるけれども、ここではバイキンとカガミについて少し触れておく。この年頃の被験者には比較的珍しいことと思えるからである。バイキンは普通われわれの目にとまらないが、いつの間にか体内に侵入しているんな病気を引き起こす。ある意味では防ぎようのない存在である。それだけ被験者に大きな無力感、いつの間にか蝕まれてゆくような不安感があるのかもしれない。あるいは、自分自身をバイキンとみなす、悪しき自己像があるのかもしれない。とくに、あるべき自分の姿がある程度見えてくると、それとのギャップの大きさから自分を卑小化することがある。いずれにしてもかなりの不安を伴う無力感の存在を考えておく必要がある。

カガミの象徴性についてはすでに多くのことがいわれているので、ここでそれらについて一々述べることはしないが、やはりそれが自らを映してみる——内省を表わしていることは指摘しておきたい。これが時に思春期にありがちな自意識過剰におちこむ可能性を考えておかねばならないからである。それだけこの子どもが成熟しつつあるのだが、そのために一過性の不適応に陥る可能性が大きい。

(2) A%, P, Oなど大体普通である。形体水準のウェイトをつけた平均は1.65であり、この年頃の子どもとしては知的には秀れている。しかしT/Rは67秒で遅い。ただしそれはⅧ, IX, Xカードでの遅延が主な理由であり、全般的な知的プロセスが鈍いからとは考えられない。

7. ま と め

まずこの被験者がかなりの内的資質に恵まれているのは運動反応の多いことから明らかである。しかし、それが必ずしも十分活用されていない（人間運動反応が少ない）。しかし人間と動物の区別の微妙な反応（Ⅲ-2, X-2）から、動物運動反応が次第に人間運動反応へ移行しつつあることが考えられ、それは内面化、自我形成のプロセスに対応しているものと思われる。無生物運動反応の多さからかなりの緊張ないし不安が考えられるが、それは十分自我に統合されない内的な感覚に基づくためであろう。しかし多くは付加反応であり一応のコントロールはできている。又、動物運動反応にマイナス反応のあることから、十分とりこまれていない内的衝動に捉われると、現実的吟味能力の著しく低下する場合がある。しかし以上の仮説がある程度当たっているとすれば、それは思春期に入っただけの必然的なゆれの大きさによるものであって、必ずしも重篤な障害を意味しない可能性が大きい。

そう考えると、この被験者の全体反応の多いことも、物事をより抽象的、全体的に見ようとする態度の反映と考えられる。しかしそのためには、まだそれを裏づける十分な力が不足しており（人間運動反応が少ない）、そこに若干の無理が生ずるとやはり現実吟味能力が低下する。この被験者の出したマイナス反応が二つとも全体反応であるのはそのためであろう。

なお、動物運動反応の多いことは衝動的な行動化を思わせるが、FM からMへの移行期と考えられること、mの多いことなどからこのプロトコルからはその可能性は高くない。

さらに色彩反応の主反応がFC 一つであることから、感情的な反応がかなりコントロールされており、一そう行動化の可能性は少ないものと考えられる。ただし、これだけの内的エネルギーの持主が人間関係の中でそれを活用できていない（M:SC）ことから、内面化のプロセス（FM→M）がスムーズにゆかぬ場合身心症的な障害の出る可能性がある。もっとも感情場面に対する感受性はある（Ⅷ, IX, X%）、むしろそれにひきつけられている（Ⅷ, IX, Xカードの反応時間が長い）。それにもかかわらず色彩反応の少ないのは、そういう場面でどう反応してよいか判らないための混乱の結果と考えられる。したがって現実の対人関係はかなりぎこちないものになりやすい。ここで敢て推測すれば、すでに述べた内面化のプロセスがあるべき姿を志向させ、自発的な、ただしそれだけ未分化な反応を抑制しているからかもしれない。付加反応にCF が二つあるのはそれを反映しているからであろう。

マイナス反応は2つ（V-2, Ⅷ-2）あるのだが、内容的にはいずれも口唇的・依存的愛情欲求と関係があり、この被験者にとってそうした問題がまだ自我像に十分組みこまれていないことを思わせる。その一つが動物運動反応であるのは、それが幼児的なコントロールされない衝動として存在していることを示している。しかし、やや社会化されすぎている傾向はあるものの、そして時に全く未分化な依存感情に捉えられることはある（KF の存在）にしろ、基本的安定感については問題がない（陰影反応の数）。知的にはこの年齢にしては明らかに平均以上の能力がある。

以上要するに、かなりの素質に恵まれた少女が、思春期にさしかかって自我意識にめざめ、あるべき自分を志向して努力し始めたのであるが、依存欲求を十分に処理することができず、そのために一時的な混乱に陥っているものと思われる。したがって治療の方針は、この少女の依存性を十分に受け合えながら、その内面化をはかることになる。それによって、対人関係にもかなりの改善が予想され、それがさらに内面化のプロセスを促すものと考えられる。それは欠如した愛情を満たすということではなく、治療者とのかわりを通して、そうした欲求をこの子自身が自分のものとして受け入れうるようになることである。

II 継起のおよび内容分析

I カード 第1反応がPでないことは、やはり未知の場面に対する緊張の表れとみるべきなのであろう。それに動物の正面像は、外界を何がしか脅威的なものと感じている時に生じやすいと

いう。目の指摘もあって、この被験者が現在「見られている」、それだけ社会化の方向をめざしてがんばっている態度の反映と考えることができる。S部分を4つとも使っているのは、空白部分、したがって何らかの欠落感に敏感だともいえる。「ヒゲがたまっている方があったかい」という質疑段階での説明は、プロットの部分にひきずられての無理な説明である。しかしフォームレベルが崩れる程のことではなく、とくに異常な反応というわけではない。

第2反応でカードを回転しているのは、第1反応の脅威的な感じから逃れようとしたのかもしれない。形体はよくないがマイナスという程ではない。かなり珍しい反応であるが、オジイサンがこの子にとって何を意味しているのかはこのテストだけでは明らかにならない。ただ背景の白い部分を強引に切ってヒゲとするあたり、無理な感じはあるにしろそれだけの ego-strength はあるわけである。ここでも目の指摘があり、プロットのかかなり細かい部分まで意味づけようとしており、やや強迫的な印象をうける。

地図は一般に状況を知的レベルで処理しようとする場合に生じやすいという。形体的にも成功している。そこで一種の安心が生じたのかS部分も無理に意味づけせず、「分んない」といえている。質疑に問題のあることはスコアリングの際にのべたが、第1、第2反応に比べて、ややプロットから距離をおき、安定感をとり戻したようである。

第1カード全体からは、やはりかなり神経質で緊張感も高いのだが、ある程度知的なレベルで対処することが可能であり、ノーマルレベルの働きが考えられる。

II カード まずカードを回転したのはやはりカラーによる困惑とみなしたい。しかしすぐ立ち直っての第1反応はよい反応である。ことさらに赤色部分を説明し、それがいずれも建設的な明細化になっている。赤にひきずられながら、形体的にうまく処理しているわけである。量的分析でみた色彩に対するアンビバレントな態度がここに現れている。

第2反応は、子どもの遊びであるが、「家の中にいる」というのは親の庇護の下での安心感を表しているのかもしれない。「服が珍しいので喜んでいる」のは、服をペルソナと考えれば、新しい役割を与えられて意気こんでいるのであろうか。普通手の出るところが出ないのに、である。「黒い」という指摘はそこに若干の憂鬱な気分があるからかもしれない。量的分析で考察したように、この子の問題が思春期にかかわる自立の問題であるとすれば、いかにも子どもらしく、多少の不自由はあるにしろ、親から与えられた着物を着て喜んでいる姿は、背のびさえしなければこの子がそれなりの活気のある子どもでありうることを示している。なおこの反応でも第1反応と同じく、赤色部分に対して積極的な言及がある。一つは D_2 に関わるものであり、ここではじめて色彩反応が出た。 D_1 については、第1反応の触覚の部分は不要といい、検査者の「口は？」という質問にも「ない方がいい」と答えている。Iカードにおける、とくにS部分にひきずられてやや無理な説明をしているのに比べると、かなりしっかりしてきている。しかし目やハナの指摘は、同時に細部にこだわりすぎる感じであり、無理にも隠された意味を探ろうとする不安の反映とも考えられる。

色彩に対する軽い困惑がみられるが、それが必ずしもマイナスに作用しない。子どもらしいあり方にとどまる限り、活発な、不安のない、そして自分の立場も明確にうち出せる状態なのだが、自立への志向がこの安定を揺さぶるのであろう。反応の質はノーマルというよりもかなり秀れたものである。

III カード 第1反応まで30秒かかっている。色彩回避傾向のある人はⅡカードでつまづくことが多いが、この被験者はW傾向のために、赤と黒がバラバラに分れているこのカードを全体に纏めるのに時間がかかったのであろう。しかもその纏まりぐあいは、決してぴったりしたものではない。反応そのものは平凡反応である。女性の踊りで、くるくる回る激しい動きに、「そこ持って」と一つの中心がある。何か安定の中心といった感じをうける。胸のふくらみから女性というのも、女の子としての自己像が順調に成長しつつあるものとみたい。問題は D_2 をひもでつった火とみていることで、女性の踊りとは何ら直接的な関係がない。あるいは、火のもとで踊る女性についての言及が不十分であったのであろうか。いずれにしろ、女らしい情感に身を委せて踊るには、なお若干の時を必要とするようである。

第2反応で注目すべきことは、はじめのカニの反応が、質疑段階で靴をはいた二本足としてのべられていることである。これが、ただそう見えるままに全体としてのカニの概念にとりこまれているのならばおかしいことになる。しかし、ディズニーばりの空想的な擬人化としてみれば、この年頃の子どもには普通のことである。質疑でそのへんをもう少し確かめるべきであったことはすでにのべたが、ここでは空想として考えておく。もしカニが、悪しき親のシンボルとして作用していたのならば、この空想化は一種の回避である。目とハサミの指摘は、このカニがかなり脅威的な意味をもっていたのかもしれない。後に出るⅥカードのクモの口のことを思うと、カニ—母親という対応はあったかもしれない。

ここで唐突に付加反応が出る。説明があいまいでかなりの混乱がある。第2反応の困惑がまだ続いているとみてよいのかもしれない。そして D_1 の形体に救われてチョウネクタイに逃げた可能性がある。男の人というのも、女性像の回避とみられなくもない。

この被験者はかなり難しい場面でも、何とかこなしてゆくだけの力がある。何かの感情に捕えられても、無難に処理することができる。しかし何かのイメージ、おそらく悪しき母親イメージにぶつかるとかなり混乱するのではないか。しかしそこからの回復力はある。

IV カード イヌが前足を立てて坐っているかっこうである。このカードは父親カードといわれている。男性的権威、社会的権威を表しているわけである。それに対して忠実なイヌのイメージが生じ、しかも d_i と F_c で目の指摘がある。主人の顔色に敏感に反応するイヌの感じそのままといってよい。ということは、この被験者が社会的権威に対する甘えの感情と共に、それに対する忠実な態度の持主であることを示唆している。イヌに対してこの子どもがどんな気持をもっていいのかは、このテストで明らかにすることはできないけれども、男性的権威が、被験者には親しみ深く自分を守ってくれるものと感じられている可能性もある。ロールシャッハの被験者は、

プロットを一方で内界として同時に外界としても反応するからである。d₁のSに対する言及は、Iカードの反応にみられる空白部分に対する敏感さの表れであろう。

第2反応は「暗い森」である。女の子にとって森はどんな意味をもっているのでしょうか。それがKFであることも踏まえて、深さとか暗さ、そこから無意識、母なるものにつながるのではないかと思う。そこからギャーと道が出てくるのである。このいい方には余程mの感じがある。暗い森の中で十分に熟さぬままに道だけ唐突に明るみに出てきた、という感じである。もう少し、この子どもは無意識の世界にとどまる方がよかったのかもしれない。しかしふり返った森には垂れた枝が見えている。量的分析で背のびしているのではないかと考えたことがこういう形で現われている。しかし、思春期に自我がめざめてくるというのは、多かれ少なかれこうした唐突な、自分を押し流すような衝動のようなものかもしれない。その導き手に第一反応のイヌがいる、と考えるのは少し空想的に過ぎるであろうか。これが2番目に好きなカードというのは、おそらくイヌのイメージから来ていると思うのだが。

世界とのかかわりにおいて、この子には基本的な信頼感のごときものがあるのではないか。それがいわゆる大洋感情とどこかで通じているのかもしれない。しかし、今やそこからいやおうなく出立しなければならないのであろう。しかしこうした信頼感がある以上、そこに大きい不安があるとは思えない。

Vカード 第1反応は平凡反応でもあり問題はない。しかし第2反応でマイナスが出ている。これはおそらくこの子のW傾向のためである。VIカード、IXカードにみられるように、この被験者にDを出す能力がないわけではない。しかしそれらのカードの反応は、あるものの全体像として纏まっており、手とか足とかいう部分の独立したものではない。この被験者は、AdにしろHdにしろ顔を除いては出していない。だから第2反応でアヒルのクチバシを見て、それをクチバシというd反応にとどめることができなかったのである。これはおそらく、全体とのつながりのない部分を認めるのが難しいためであろう。心理的に自立しようとする被験者にしてみれば、それでもなおより大きい全体とのつながりを失いたくない気持ちが強いのではないか。そこから「くっついて寝そべっている」という説明がくる。運動の方向が求心的なのである。それはIIIカードの第1反応の女性の踊りが、真中に支えとしての中心をもっているのと軌を一にしている。しかし、このカードではそのために全体としての知覚に大きな歪みが生じているのが問題である。どうしてそう見えるのかという問いかけに対しても「春だから風がきつくて」というプロットとは全然関係のない理由づけがなされている。このコメント自体論理的にややおかしい所がある。しかし春を思春期一自立ととればそれに対する風当りが意外に強く、結局求心的に体を寄せあい、退行的に寝そべっている、というのは頷ける感じである。しかも被験者自身は、「形がよく似ている」とがんばっている。これは、Iカードの第1反応のネコのヒゲについての強引な理由づけと同じである。ある程度無理と分っていながら、だからこそあえて主張するといった、依怙地な側面がうかがわれる。だから一見DWと似た過度の一般化という印象を与えながら、ややニュアンス

が異っている。

この被験者のW傾向には、単に野心的な成就欲求というよりも、全体的な意味づけを通して自他のかかわりを確かめようとする動きがあるものと思われる。それが不安から発するものであるだけに、時に DW 的な、部分を見て全体を律する過度の一般化が生じ、現実吟味能力が異常に低下することがあるわけである。このカードを嫌いなカードというのも、それと関連しているかもしれない。

VI カード このカードでは第1反応を出すのに30秒かかっており、かつはじめてDを出している。しかし質疑段階では再びWに戻った。第2反応のクモということも考えあわせ、おそらくこれは D₁ 部分の回避と思われる。この部分はロールシャッハカード中最も陰影の目立つ所であり、かつ女性々器として見られやすい部分である。被験者にとってそのような生々しい愛情欲求はまだ十分にうけとめることができず、何かが感じられはするのだが差し当っては避けておきたい、ということなのであろう。しかし質疑段階では、開かれたキツネの皮ということでFcの平凡反応としてうまく全体を纏めている。だからこの子どもの基本的な信頼感がすっかり損なわれているとは思えない。むしろ順調に発達していると考えてよい。

第2反応のクモはや 脅威的な反応である。キバのついた口の指摘がある。あるいは貪り食う母親のイメージが重なっているかもしれない。すると母親のネガティブイメージを避けるために第1反応のDが出た、ということになる。このクモには陰影のかかっている可能性がある。母親との関係をも含めて、この子どもの依存欲求にアンビバレントな影のさしこんでいるのは確かである。しかし発達的にみればそれは当然のことであり、それを統合してゆくのが思春期の課題なのだともいえる。かなりのつまずきを見せたVカードの後ではあるが、このカードの反応に大きな偏りはない。

VII カード このカードでも初発反応に35秒かかっている。このカードはしばしば母親カードとして意味づけられている。柔らかい陰影と D₁ の女性々器などからそういわれるのであろう。そうした母親イメージも含めて、女性像をみるのにこの被験者はこれだけの時間をかけたのではないか。それはVIカードにおけるアンビバレンツのこのカードへのもち越しとも思われる。女の子が自分を女性として認めることは、そのまま思春期の自己同一性を確める営みにつながっている。それが一方で力の意識をかきたてながら、他方何がしかのおぞましさを伴うのは周知のことである。何はともあれそれが自らを内省する、鏡をのぞきこむ姿勢になったものと思いたい。そして左がほん物なのか右が本当なのか、本来の自分とはそもそも何なのかというおなじみの問答が始まるわけである。今までに考えてきたように、この子どもの問題が思春期の自立とかかわるものであることはまず間違いがないように思われる。

ところが第2反応は一転してオタマジャクシになる。しかもこの被験者には珍しく領域はDである。これはVIカードと同じく D₁ 部分を避けた可能性があるが、むしろVカードの第2反応について述べたように、オタマジャクシ自体は全体像をみているので、無理にWにこだわる必要が

なかったからだと思う。フニャフニャと弱いオタマジャクシが口を開けているのは、依存的な口愛性の表われとみてよいかもしれない。とに角、第1反応の厳しさから一転して無力な依存状態に逃げこんだ、ということはある。しかし、思弁的になるのを怖れずにいえば、オタマジャクシはカエルへの変身を約束されたいわば可能性の象徴である。その意味ではあまりにも急激な自立をめざすことなく、自然のプロセスをもう少し待つ方がこの子どものペースには合っているのかもしれない。全体ないし中心との結びつきの強調される今までの諸反応からも、そのことは裏づけられていると思う。

ここでも第1反応と第2反応とで、お互いの密接な関連と同時に、この子どものアンビバレントな動きがみられるようである。ここで被験者がトイレに立ったのも頷けるような気がする。

VIII カード 第1反応からすでにカード回転である。しかしⅡカードと同じように、反応そのものは悪くない。FCのむしろよい反応である。全彩色カードということで、情緒的場面へのたじろぎがあっても、それに圧倒されることなく場面の雰囲気になじみ入ることが出来る。

しかし第2反応はマイナスである。はじめサカナの全体像を見て、ついでD₃上部の口が見え、無難に全体の中に組みこんだものと思われる。この被験者の知覚がおかしくなるのは、まず部分が見えそれを何とか全体像にもってゆくために無理をする場合(Vカード第2反応)、まず全体が見え、ついで小さなS部分が見え、それを強引にはじめの全体像に組みこもうとする場合(Iカード第1反応)である。いずれの場合もその無理がかすかに感じられている可能性があり、そのための理由づけはプロットとは離れてしまっている。この第2反応は後の方に近いものであるが、被験者は多分そのおかしさに気づいていない。ただD₃上部の欠けた部分に気づくとそれに意味づけせざるをえなくなり、それが全体の知覚とのバランスを失っているのである。ただしこの場合、その程度はそれ程破壊的ではない。いずれにしろ、部分と全体との関係づけに若干の問題があり、とくに欠落部分へのこの過敏さ(それはⅣカード第1反応のイヌのミミについてもいえる)は、この子どものひそかに感じている不安感とその防衛と考えてよいと思われる。

第3反応のチョウチンは、チョウチンがこの子にとってどんな意味をもつかが明らかでないだけに何ともいえない。チョウチンをぶら下げたり「さす」ということばの意味が分らない。しかし勉強の時は電気が無駄になるのだから、多分薄暗い明りなのであろう。勉強をそのまま知性化の明るみとすれば、チョウチンの明りは女性的な薄明なのかもしれない。するとこの子どもには知性と女性々との間に若干の葛藤があるということになるが、共に成熟に欠くことのできぬプロセスとすれば、そこにこの子の直面しなければならぬ問題が同時に存在していることになる。「さす」というのは「ぶら下げる」に対応している以上、おそらく下にさすことになる。

部分と全体との関連づけに問題がある。おそらくそれはこの子の内側にひそかに感じられている不全感とかかわりがある。

IX カード 第1反応はDS部分に対してのものである。ここではⅧカードと違って色彩回避がみられる。しかし形体が崩れているのではないから、そこでこの被験者がすっかり混乱してし

まうわけではない。むしろ、多少とも困惑する場面で視野を現実的なものに絞ることによって、何とかその場を処理しうる能力の表れである。この反応にはおそらく陰影がかかっている。コップは水を飲むための器である。ここに口愛的な依存欲求の現れていることはまず間違いない。この子どもは、対人的なかかわりの中で、みずからの愛情欲求の渇きをいやしてくれるものを求めるのであろうか。「下は台」というのはとってつけ、それもどこまでの部分が入るのがあいまいなことは、スコアリングの所で述べた。

第2反応のパチンコは、この子どもとパチンコとの関わりを知らぬ限り何ともいえない。しかし「開いてるとこ」というのは受け入れられるという感じとかかかっているかもしれない。第1反応で愛の渇きがいやされて少し楽になったのであろうか。しかし「形から」というコメントは、そこに情緒的なかわりのないことを強調する、かたくなさの表れかもしれない。

すると第3反応のカナヅチは、陰影反応の可能性も含みながら、こうしたかたくなさに対する鉄槌としての意味があるのであろうか。一つには、第1反応で回避した部分を何とか反応をもってゆきたい、という気持があったかもしれない。だとすれば、第1反応に際しての困惑が少し尾をひいていたのであろう。人間関係の文脈に、カナヅチを通して建設と破壊の両面を感じている可能性がある。

X カード 40秒かかってカードを逆方向のままハナビという反応が出ている。かなりの動揺があったと考えられる。もともとこのカードには拡散的な傾向があり、それが時に人を混乱させるといわれている。スコアリングはmFでありこの被験者もおそらく図版のその傾向に動かされたのである。しかしD₁₄を「ここ持つとこ」といい、運動の支点をみているのはⅢカードの第1反応と同じで、かなり動かされることはあってもシンはしっかりしているという印象をうける。ハナビで色がきれいだから一番好きなカードという。この子ども自身、支点さえしっかりしておれば、ある程度対人関係の中でも忘我的にふるまえるし、かつふるまいたがっているのであろう。

しかし第2反応はバイキンであり、その後両手で顔を蔽っている。バイキンの意味についてはすでに述べたのでここでも繰り返すことはしない。ただ運動会という楽し気な雰囲気の中で、「かわいそうだが」そのうちの一つが勝負のために殺されなければならない。他の連中はそれと無関係に「駆けている」。ある意味ではいやかうなしの必然性で、かなり残酷な事態である。それがプロトコルで読む限り淡々とした調子で述べられている。思い切ったことを案外冷静にやっつける所があるのかもしれない。楽しさと痛ましがごっちゃになって未分化のままなのである。その点多分に幼児性が残されていることになろう。

それとこのカードに限ったことではないが、Ⅶ～Xカードの反応時間が他と比べて著しく長いことを考えておく必要がある。これについてもすでに述べてあるが、IXカードのコップとカナヅチといい、色彩に対するアンビバレントな態度はかなり顕著である。全体としては惹きつけられている傾向が強いといえようか。

所 見

内的資質のかなり豊かな少女である。しかしそれを十分に生かしうる程に自我が成熟していない。それだけにそのエネルギーは衝動性として潜在しているが、生長しつつある自我を脅やかすものとしてひそかに感じられているので、必ずしも現実場面での行動化にはつながらない。むしろ外界に投影されて一つの活気のある世界を形成する。しかし逆にそれが当人には脅威的なものと感じられている可能性がある。又、現実場面、とくに人間関係の文脈でそれらが発散されることが少なく、そのためこのエネルギーが内向し、一種の身心症的な症状をもたらす可能性がある。

ある程度の自我の発達で、この子どもをいやおうなしに内面化の方向に導いており、被験者は現在、世界を自分なりに納得しうるものとして全体的に把握しようと努めている。しかしそのための力が不足しており、そのために時にかなりの現実歪曲の生ずることがある。本人にはかすかにそれが自覚されているのだが、それが何らかの不全感につながって、かえって強引に自説に固執する依拠地な面を形成している。

対人関係には強い関心と感受性をもっているが、そこに巻きこまれて我を失うことへの警戒心から、できるだけ社会的に反応しようとし、惹きつけながら引っこんでしまうというぎこちなさをみせる。もっと自由になれば豊かな人間関係を享受しうる力はあるのだが、自我の中心のごときものが次第に形成されつつあるので、適切な場面が与えられると共に本人がもう少し成長すれば、このことは比較的容易に実現可能になるものと思われる。

いわゆる基本的安定感ないし対人的信頼感は、全体としては十分である。ただし未分化な愛情欲求と社会化された依存欲求とのギャップが大きく、この子ども自身、とくに口唇レベルの愛情欲求を自我構造の中にどう組みこむべきかで混乱しているように思われる。なお知的能力はこの年齢としては少なくとも平均以上である。

以上の考察を纏めると、この子どもの問題はおそらく発達上の一時的な動揺の振幅の大きいものと思われる。むしろ自立性の強調されすぎている所に問題があるといってもよい。だから基本的には一過性の障害と考えてよいのであるが、時に現れている現実吟味能力の低下などを思うと、何らかの治療的介入が望ましい。その場合、治療者との関係を通してこの子どもの依存性を全体的な自我構造にいかに関わりこむかが当面の課題となる。従って治療のプロセスにかなりの依存性の生ずることを考慮しておかねばならない。ただし基本的問題は依存と独立の葛藤であるから、たとえば母性愛欠如のケースに時に必要な甘えべったりの関係では逆効果となろう。そのへんのかねあいが微妙な感じであるが、予後はかなり明るい。そのことがこの子どもの内面化、対人関係の改善にもつながってゆく可能性は大きい。

ま と め

11才の少女のロールシャッハテストの解釈結果を示した。症例およびスコアリングについては

別の報告（氏原1981b）を参照されたい。ある程度初心者に理解して貰えるように配慮したために、説明がやや冗長になったのではないかと怖れている。しかし、経験のある検査者にも十分興味をもって頂けるよう、筆者なりに現在考えていることは一応述べたつもりである。初心者・経験者を問わず、このテストに興味と関心を抱かれる人々のために、一つの具体的な資料として役立つことがあれば筆者にとっては大きい喜びである。

参考文献

- Klopfer, B. et al. 1954 Developments in the Rorschach Technique vol. I. Harcourt Brace & World.
- 村本詔司 1978 分り合い易さと分り合い難さに関する臨床的ならびに思弁的な考察 河合他編「臨床心理ケース研究 I」207～230 誠信書房.
- 氏原 寛 1981 ある修道尼のロールシャッハテスト解釈 大阪外大学報51 75～91.
- 氏原 寛 1982 11才の少女のロールシャッハプロトコルとスコアリング 大阪外大学報（印刷中）